創刊20周年特別談話

今、もし福沢諭吉がいたら

渡辺利夫
拓殖大学顧問

福沢諭吉の思いとは……今の世界については、どのように見るのだろうか

Q 福澤諭吉が文明開化論者であり啓蒙思想家だというのは一面的な見方だと渡辺さんは主張していますね。

福澤諭吉といえば、多くの読者は、文明開化論者、啓蒙思想家としてイメージされておられるのではないでしょうか。そのイメージは、大ベストセラー『学問のすすめ』に由来しています。この著作は、当時の欧米で流布していた社会思想の内容を、庶民の誰にでも理解できるように、福澤の言葉で平易に書き進められています。日本人が初めて接する欧米思想の真髄です。多くの人々に共感され、他方では、一部の人々からの反発を受けながらも、読まないではいられない、そういう著作であったに違いありません。

ここでいう西欧思想とは、「天賦人権説」と「社会契約説」の二つです。明治の初期にあっては、いかにも革新的、いや革命的な考えとして読む者に強い衝撃を与えたはずです。天賦人権説とは、生きとし

生ける者は、その権利においてすべて平等であり、これは天から賦与（ふよ）された侵すべからざる生得（しょうとく）の権利であるという考え方です。アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言などにその具体的な形をとってあらわれています。

わたなべ　としお
一九三九年、甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、経済学博士、筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、拓殖大学総長、外務省国際協力有識者会議議長（前）、第十一期学術会議会員、アジア政経学会理事長（元）、山梨総研理事長を歴任後、現職。二〇一一年、正論大賞を受賞。著書として『成長のアジア　停滞のアジア』（土屋作造賞）、『開発経済学―経済学と現代アジア』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア太平洋賞大賞）、『神経症の時代　わが内なる森田正馬』（開高健賞）、『放哉と山頭火　死を生きる』などがある。

もう一つは、社会契約説です。人間は、本来、権利においてはまったく平等である。政府とは、この平等の権利をもつ人間との約束（「契約」）によって成立されるべきものだ。つまり、国民と政府との関係は契約関係であり、契約を守らない政府は廃棄されても致し方ない。思い切って単純化していえばそういう考えです。

ところで世に流布されているこういった文明開化論者、啓蒙思想家としての福澤論からすると、いかにも意外と思われることが『学問のすすめ』の中で語られています。

実はそれは「意外」どころか、それこそが後につづく福澤思想の中核となっていくのです。福澤は論をこう進めます。

政府というのはとかく暴政を行うものだが、これに抗するに国民は何をなすべきかと読者に問いかけます。そして福澤は答えは三策あるといいます。

第一策は、「節を屈して政府に従う」、第二策は「力を以て政府に敵対する」、第三策は「正理を守て身を棄る」です。このうち第三策が最上策だと福澤はいうのです。福澤はこういっています（現代語訳、渡辺）。

正しい道理を守ってわが身を捨てるとは、天の道理を信じて疑わず、いかなる暴政の下にあっても、いかなる苛酷の法律に苦しめられても、なおその苦痛に耐え、自分の志をまげず、まったく兵器を携えず、片手の力さえ用いることもなく、ただ正しい道理を唱えて政府に迫ることである。……世を憂いてわが身を苦しめ、あるいは命をも犠牲にすることを西洋の言葉では「マルチルドム」という。失うものはただ自分ひとりの身体だけだが、その影響力には千万人の死、千万両の費用をかけた内乱にはるかに勝るものがある。

ウェブスター辞典に当たってみますと、マルチルドムつまりマーティダム（martyrdom）とは、the suffering of death on account of adherence to a cause and especially to one's religious faithとあります。つまり、一つの要因、とりわけ人間の宗教的信念に忠実であるがゆえに死を受容すること、といった意味を表しています。

日本語でいえば、「殉死」「殉教」といった語感です。

実は福澤はここで西郷隆盛をイメージしているのです。福澤は西郷とは面識がありません。しかし、西郷が福澤の著作を読んで深い感銘を受けたという話を福澤は聞いていたそうです。福澤思想に共鳴した西郷が、部下の相当数を慶應義塾に派遣していたことは記録にも残されています。

福澤と西郷との関係を示唆する人物に増田宗太郎がいます。増田は、中津藩士の家に生まれ、幼少

時には福澤家に可愛がられた人でもありますが、同藩内の国学者により水戸学を徹底的に教え込まれ、尊王攘夷家として成長しました。明治維新が成るや、政府の高官となった政治家や実業家がにわかに文明開化を唱えるようになり、維新の受益者として華美な生活を送り、蓄財に励む姿に増田は強い憤りをもつようになりました。増田は文明開化の推唱者である洋学の第一人者を福澤だと見立て、何とその暗殺を企てたのです。

福澤が母と姪の二人を引き取りに中津に帰郷した時を見計らっていたのですが、ひょんなことからこの計画は失敗してしまいます。このあたりの事情は『福翁自伝』の中に書かれております。増田はその後みずから悟るところがあって、何と慶應義塾に入学し福澤の自宅に寄寓してその薫陶を受けることになったのです。

しかし、西南戦争の勃発の報に接するや、増田には反政府の情念が再び強く湧きおこり、豊前中津藩中津隊の隊長として薩摩の西郷軍に加わることになり、西郷に邂逅、その人物の思想の深さ、器の大きさに圧倒され、この人物と生死をともにしなければ自分の生きてある証がなくなると考え、西郷への敬慕の念を深くして城山での戦いに殉じたのです。

福澤は自分の門下生でありながら、学問半ばにして西郷軍に参加し、城山で西郷と死をともにした、自分のよく見知っていた増田という人物の眼の中に宿る西郷という人物を眺め、そうして改めて西郷のことをはるかに仰ぎ見たのではないか、と思われるのです。

鹿児島に下野していた西郷は、佐賀の乱、熊本神風連の乱、萩の乱のいずれにも呼応することはありませんでした。鹿児島私学校生徒の挙兵にも積極的に応じたというのではありません。むしろ西郷はそれを押し留めていたのです。挙兵の報せが、大隅半

島小根占で狩猟をしていた西郷に届いた時の一言目が、「しもった」であり、二言目が「天だ、天でごわすよ」であったと伝えられています。その後の西郷はもう「死に場所」を求めて戦陣をさまよったのです。福澤は、西郷のその姿の中にマルチルドムをまぎれもなく見ていたのではないか、というのが私の見立てです。

Q 福澤は、旧社会の士族の士風や士魂を重んじ、殉死、殉教という道徳律をもって生きよ、と指導者に迫った人物だ、というのが渡辺さんの福澤論の見立てですよね。

福澤の人生の美学として読むべき論説が『瘠我慢之説』です。福澤がこの論説を書くきっかけとなったのには、次のような事情があったらしいのです。明治二十四年の秋、福澤は徳川藩が移封された駿府城あたりが今どうなっているのかが気になり、ここに出向いたのです。途次、初めて自身がアメリカに渡った時に乗った「咸臨丸」が、その後、幕府の運搬船として用いられていたのですが、清水港に停泊中に官軍の攻撃を受けて、七名の船員が殺害されてしまいました。当時、官軍の目をはばかって死者を葬る者が誰もおらず、死体は朽ちるままに船中に放置されていたらしいのです。これをみかねた駿河の侠客清水の次郎長こと山本長五郎が手下を使って船から七名を引き出し、手厚く葬ってやったのだそうです。その十七回忌に改めて清水港近くの興津の清見寺に「咸臨丸殉難諸氏記念碑」が建立され、福澤はこれを弔うためにこの寺を訪れたという次第です。

福澤は石碑に深々と一礼をし、その後石碑の背後にまわり、「食人之食者死人之事」と刻み込まれ、これを揮毫した者の名前として「従二位榎本武揚」

と鮮やかに彫られているのを目にして驚きます。「食人之食者死人之事」は「人の食を食む者は人の事に死す」と読みます。〝徳川家の幕臣として仕えて禄を食んだ者は徳川家の事に死すべきだ〟といった意味です。

同時に、福澤の頭をよぎったのは、この年の春、榎本が外務大臣に任じられたというニュースであったにちがいありません。

箱館（函館）での戦いで榎本にしたがい、官軍への投降を拒否して惨たる戦死を余儀なくされた多くの部下をそのままに、自分自身は生き恥を晒して拘束され、東京に護送、禁固の刑に処せられたものの、ぬくぬくと生き伸び、明治新政府において大いなる重用を受け名声を得た人物が榎本です。外務大臣の後は駐清特命全権大使、枢密院顧問官と位人臣を極めています。

そういう人物が、後世に残る石碑にそんなことを刻みつけていいはずがない。福澤は怒気を含んだ気分を収めることができないままに三田に戻り、一挙にしたためたものが『瘠我慢之説』だったようです。そういう勢いが吹き出ている名文が『瘠我慢之説』です。福澤は、榎本の出処についてこう記しています（現代語訳　渡辺）。

古来の習慣にしたがえば、この種の人は俗世から離れ仏所に入り、死者の冥福を祈って供養を行うべきはずの存在である。現在の世間の風潮からして、仏門に入り髪を剃り落すというのも似つかわしくないというのであれば、身を人目につかないところに隠して生活を質素にし、すべてのことに控えめにし人々の耳目に触れないという覚悟をもってこそ本来の意たるべきであろう。

榎本の身の振り方についてコメントするのは、別に個人として難じたいがためにそうしているのではありません。榎本は武人としての考え方や行動規範から逸脱しており、これは国家永続のために決して看過していい問題ではない、と福澤はいいたいのです。同時に福澤は、かねて同じくその出処進退に疑念を抱いていた勝海舟をこう難じます(現代語訳　渡辺)。

仮に、戦いにおいて勝利の可能性がなくなったとしても、戦う以上いかなる苦難に際しても力のあらん限りを尽くし、最終的に敗色濃しとなれば和議を提案し、これが受け入れられねば死を決する覚悟を持つことが立国の公道であり、この公道に従うことが国民の義務である。つまりはこれが俗にいう瘠我慢である。瘠我慢なくして、弱者が強者に対峙して地位を保つことなどできない。瘠我慢の精神をもたない国は戦争においてはもとより、外交においてさえ敗北を喫せざるを得ないではないか。

それでもこれが幕軍と倒幕軍という国内の権力次第であるからまだしも、わが国と外国との戦争であったとしたら手際よく軍を引いてしまったりした場合にはどうなっていたことかと嘆じて、さらに次のようにいうのです(現代語訳　渡辺)。

国内で瘠我慢のできない者は外国に対しても同様だといわざるをえない。こんなことを書くのも不吉で縁起でもないが、億万が一でもわが日本国民が外敵と抗して、なりゆきを見計らい手際よく兵を解くようなことがあったとしたら、これを何と表現したらいいのであろうか。かくして幕府解散の顚末は国内のことにはちがいな

いが、一例をつくったものだといわざるをえない。外国と戦っているうちに、みずから兵を引いてしまうなどということがありえようか。勝のやったことは、つまりはそういうことなのではないか、と福澤は苦々しい思いで述べています。

Q 福澤はなぜあれほど朝鮮問題に深くかかわっていったのでしょうか。

福澤が主宰する『時事新報』が創刊されたのは明治十五年（一八八二）です。以降、明治十八年末までの四年間に、この新聞に掲載された社説の中で朝鮮問題を扱ったものは九十編前後、圧倒的に頻度の高いテーマでした。

明治維新をモデルに朝鮮の近代化を求める朝鮮開化派の人物が、福澤のところにある時期から頻繁にやってくるようになりました。

そして福澤は自分を頼ってくる朝鮮人には、救いの手を差し伸べることが自分の責だと感じるようになります。

幕臣福澤は、明治維新を傍観者としてやり過ごしたことが悔やまれていたのです。そのために、みずからの思想の実現の場をどこかに求めており、その場が朝鮮となったと私は見ています。

朝鮮を案じる福澤は、文筆のみならず、行動にも出ます。確証はないのですが、日本刀数十口を横浜の商人の名義をもって開化派に送ったそうです。福澤と開化派はモールス信号を通じてつながっていました。さらに福澤は朝鮮政府に働きかけ、諸改革の顧問として教え子の牛場卓蔵と井上角五郎を朝鮮に派遣します。

福澤の牛場卓蔵への激励文「牛場卓蔵君朝鮮に行く」が『時事新報』に連載されました。福澤が門下生

に何を期待していたのか、福澤の門下生に対する指導の姿勢がよくあらわれている文章でもあります（現代語訳　渡辺）。

牛場君もまた朝鮮においては私心を捨て去り、朝鮮の政治の事には容喙することなく、朝鮮の習慣に妥協せず、君の唯一の目的は君がつねに学んできた西洋の学問の趣旨を伝授し、朝鮮の上流の士人にみずから考えさせることだと私は考えています。

しかし、福澤が支援していた朝鮮開化派の政治改革運動は失敗、指導者の金玉均、朴泳孝などは、結局、守旧派によって追い払われてしまいます。甲申事変の無惨な失敗です。

甲申事変による開化派への凄惨な極刑に怒り心頭に発した福澤が明治十八年『時事新報』に「朝鮮独立党の處刑」を書き、「人間娑婆世界の地獄は朝鮮の京城に出現したり」と激憤します。

朝鮮の現状は、野蛮というより妖怪や悪鬼の世界である。この地獄をつくりだした当局者は事大党の官僚たちだが、その後見人はまぎれもなく中国人である。よくも事大派はこれほどの非情のことをなし、刑場に臨んで刑執行をやったものだ。その残忍なやり口にただぞっとし、身をふるわすばかりであるといっています。

福澤のかの『脱亜論』執筆の直接のきっかけが、甲申事変の当事者に対するこの冷徹無比な対処にあったことは間違いありません。この論説が明治一八年二月、『脱亜論』の発表はその二十日後の三月のことでした。

今日の謀を為すに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予あるべからず、寧ろ、そ

福澤諭吉

の伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那、朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。

現代の東アジア地政学は、幕末・維新期を再現させるかのごとくに、剣呑な状況へ突入しようとしています。

他国が自国の領域を平然と侵害する現状を拱手傍観し、集団的自衛権のあれほど限定的な行使容認までに異を唱えるというのであれば、そのあまりに定見のない外交に、泉下の福澤は、深い慨嘆の息を吐いているにちがいありません。大いなるナショナリスト福澤諭吉に学ぶべきが、現代だと私は考えます。

（以上）